

## 15 「十分の一献金の四つの理由」ルカ 16 章

マラナサ・グレース・フェロシップ 菊地 一徳氏

今日はお金のお話をいたしますので、ルカの福音書 16 章をお開き下さい。イエス・キリストのたとえ話を通してお金の話をしたいと思います。お金の話と言っても先ほどもお話ししたようにお金儲けの話ではありません。お金を神様にささげる、神の働きにささげる、与えるという話です。献金という奉仕、またお金を用いて神の栄光を表すというミニストリー、それについてこのルカ 16 章から皆さんにお分かちしたいと思います。献金のお話をされるだけで耳をふさぎたくなる、お金の話はもう教会では聞きたくない、という人も大勢いると思います。実に不人気な話になると思います。嫌われてしまうかもしれません。誤解されるかもしれません。それでも、それを私は意に介さず、恐れずに聖書からハッキリとしっかりとお金について皆さんにお伝えしたいと思います。

ある教会では、やたらめったら献金のアピールをいたします。「今、お金が必要なんです。皆さんの献金がなければ、この働きは成り行きません、成り立ちません、つぶれてしまいます。このミニストリーを継続するためには、皆さんのサポートが必要なんです。今この教会のプロジェクトのためには、教会建築をするためには、皆さんの献金が必要なんです。ささげて下さい。」プレッシャーを与えられることが多いと思います。でも、もしそれが神の働きであるならば、本当の神のミニストリーであるならば、必ず神様は必要を備えて下さいます。これは何度も皆さんにお伝えしておりますけれども、私の牧師のチャック・スマスは、「神が導かれるとき、神は備える。When God guides ,He provides.」MGF としてもこの言葉をしっかりと心に刻んで頂きたいと思います。神様が導かれるならば、必ず備えがあります。もし、そのミニストリーが、神様が始められたものであるならば、必ず神様は必要を備えてそのミニストリーを継続させて下さいます。でも、もし「お金がなければ、サポートがなければ、献金がなければ、もうそのミニストリーは成り行きません、成り立ちません、継続できません」ということであるならば、そのようなミニストリーはさっさとつぶした方がいいと思います。「お金がないとこのミニストリーはつぶれます」と言うならば、いっそのことつぶした方がいいと思います。詩篇 37 : 25 を開いて頂きたいと思います。そちらに目を留めて頂いて、その前後を私の方で読みますから、皆さん目で追って頂きたいと思います。25 節に注目して頂きたいのですが、私の方では 16 節から読み上げますので目で追って見て下さい。

16 : ひとりの正しい者の持つわずかなものは、多くの悪者の豊かさにまさる。

17 : なぜなら、悪者の腕は折られるが、主は正しい者をささえられるからだ。

18 : 主は全き人の日々を知っておられ、彼らのゆずりは永遠に残る。

19 : 彼らはわざわいのときにも恥を見ず、ききんのときにも満ち足りよう。

20 : しかし悪者は滅びる。主の敵は牧場の青草のようだ。彼らは消えうせる。煙となって消えうせる。

21 : 悪者は、借りるが返さない。正しい者は、情け深くて人に施す。

22 : 主に祝福された者は地を受け継ごう。しかし主にのろわれた者は断ち切られる。

23 : 人の歩みは主によって確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。

24 : その人は倒れてもまっさかさまに倒されはしない。主がその手をささえおられるからだ。

25 : 私が若かったときも、また年老いた今も、正しい者が見捨てられたり、その子孫が食べ物を請うのを見たことがない。(詩篇 37 : 16~25)

「正しい者が見捨てられたり、その子孫が食べ物を請うのを見たことがない。」(詩篇 37 : 25)

「お金が必要なんです。献金が必要なんです。サポートが必要なんです。そうでなければ私たちはもうこれ以上この働きを続けられません。この教会は維持運営できません。」

何かがおかしいですね。

26 : その人はいつも情け深く人に貸す。その子孫は祝福を得る。

27 : 悪を離れて善を行い、いつまでも住みつくようにせよ。

28 : まことに、主は公義を愛し、ご自身の聖徒を見捨てられない。彼らは永遠に保たれるが、悪者どもの子孫は断ち切られる。

29 : 正しい者は地を受け継ごう。そして、そこにいつまでも住みつこう。(詩篇 37 : 26~29)

「正しい者が見捨てられたり、その子孫が食べ物を請うのを見たことがない。」(詩篇 37 : 25)

さらに、箴言の 10 : 3 も開いて見て下さい。

主は正しい者を飢えさせない。しかし悪者の願いを突き放す。(箴言の 10 : 3)

「主は正しい者を飢えさせない。」とあります。箴言 11 : 18 もお読みします。

悪者は偽りの報酬を得るが、義を蒔く者は確かな賃金を得る。(箴言 11 : 18)

義を蒔く者は確かな賃金を得ます。さらに、箴言 23 : 4

富を得ようと苦勞してはならない。自分の悟りによって、これをやめよ。(箴言 23 : 4)

『富を得ようと苦勞してはならない。』勿論これは、何もしないでただ家で昼寝してれば、神様がどこからかお金を用意して、天から降らせて下さるという話ではありません。ハローワークに一切行ってはいけないという話ではありません。そうではなくて、「自分の悟りによって、これをやめよ。」とありますね。教会に於いても富を得ようとして献金のアピールが力強くなされます。富を得ようと苦勞してるんです。でもそもそも富というのは主が私たちに与えて下さるものですから、むしろ主に信頼して、もしこの働きが、この教会が、神のものであるならば、神様はちゃんと必要なものを備えて下さり、私はそれを信じて主に忠実に仕えるということです。いつ給料が入るか分からない、いつその経済的な必要が備えられるか分からない。でも、何もしないのではなくて、主に信頼をして、あなたが主のしもべであれば、主はあなたにもうすでに仕事を与えています、奉仕を与えています。であるならば、あなたはそれを忠実に果たして、あとは必要を主に備えて頂くのを信じて待つということです。「お金がなければ何も出来ないじゃないですか。」それは不信仰です。主が先ずあなたに命じられたことをあなたは着手すべきです。それをスタートすれば必ず主があとから必要を備えられます。すぐに最初から備えていないのは、あなたの信仰を試すためかもしれません。それが主の働きであれば、それがミニストリーと呼ばれるものであるならば、必ず備えが主から来るということ信じなければいけません。私たちが支えなければいけないということではないんです。私たちが何とか自腹で、何とかキープする、勿論主が私たちにささげるといふ働きも、促しもされるかもしれませんが、ただ私たちが献金するのをやめたら、もう終わりだとか、私たちが支援するのをやめたら、もうこの働きは続かない。そんな不遜な思いがあるならば、それはもはや神によ

ってなされる働きではないということです。それは人間によって支えられる働きになります。

まあ、その話を敢えて冒頭に、前提としてお話しさせて頂きましたけれども、その上で私が皆さんにお伝えしたいのは、皆さんにお金をささげるようにという話です。献金をして下さいという話です。勿論、誤解されるかもしれません。中には不愉快な思いをする人もいるかもしれませんが、ただイエス・キリストもこのお金という主題を沢山取り扱って、語られているということも、皆さんに現実として知って頂きたいのです。イエス・キリストが教えられたその教えの中で、一番多く語られているのは、実はお金についてなんです。お金という主題、これをイエスが最も多く取り扱ったということを事実として、現実として、皆さんにまず押さえて頂きたいと思います。最も多く話された内容は、お金についてなんです。なぜでしょうか。理由はそんなに難しくありません。というのは、私たちは朝から晩まで四六時中、寝てる時ですら、お金のことばかり考えています。お金にまつわることばかりが私たちの関心事です。何でもかんでもお金です。仕事のこと結局はお金ですね。お金がどうなのか。将来のこと結局は、お金がどうなのか。老後はどうか。年金はどうか。保険はどうか。で、今持っているお金をどのように運用したらよいか、活用したらいいか、またはこの必要をどこから持ってくるか。今、経済難でどうしようか。借金すべきか、ローンはどうするか。もうお金にまつわることばかりです。朝から晩まで。お金に関係ない話をしていることの方が少ないと思います。お金とは全く関係のない話題は、ほとんど上がらないわけです。皆さんの胸に手を当てて考えて見て下さい。夫婦の会話でどうですか。お互いの愛を語り合うよりも、経済状態の話。親子の会話はどうですか。大学に行かせているその先で、学費も家賃も生活費も諸々、結局は子供のこともお金のこと。いろいろとこれは私たちが日常的に避けられない話題でありますので、イエス・キリストも勿論それをご存じであります。だからこそイエスはお金にまつわる話を一番多くされたわけです。それが先ず現実だということを皆さんに覚えて欲しいと思います。これはごまかしようのない現実です。結局は私たちはお金のことが一番気になるんです。お金に関係ない話なんかできないんです。

**詩篇の 119 篇**は皆さんもよく知っていると思います。御言葉の賛歌と呼ばれる詩篇で、聖書の中では一番長い章でありますね。一番長い章は**詩篇の 119 篇**で、全部で 176 節あります。で、2 番目に長い章はどこですか。これもバイブルトリビアですね。それは**民数記 7 章**というところです。で、民数記 7 章は何について書いてあるかという、実はささげ物についてです。一番長い章は詩篇 119 篇で、御言葉についてです。当然と言えば当然です。聖書は御言葉そのものですから、御言葉について一番多く書いてある詩篇 119 篇が一番長い。主題は御言葉。当たり前ですね。でもそれに次いで長いのが民数記の 7 章で、そこでの主題は、そこでのテーマは『ささげる』ということです。言わばお金にまつわる章と言っていいかもしれません。ささげるということについて、献金ということについて、書かれている箇所です。全部で 89 節あります。まあおよそ詩篇 119 篇の半分なんですけれども、それでも 2 番目に長い章です。ただ詩篇の 119 篇を読んで頂くと、御言葉は金にもまさる、銀にもまさる、かけがいのないものだということが書かれております。ですから、真っ先に私たちが必要なのは、御言葉です。御言葉以上に価値のあるものはありません。でも、それに次いで価値のあるものと言っていいかもしれません。それはお金です。お金は大事です。私たちの命もお金で計られるんです。皆さんは給料をお金でもらってますね。それはあなたの命がお金で計られているということです。

そして今からテキストの**ルカの 16 章**を開いて頂いて、そこでイエスがたとえ話を通して、お金について健全な正しい認識を私たちに持つように、そしてまた、お金を管理すること、お金を運用すること、活用すること、そして主にささげる、献金すること、そういったことについても教えて下さいますので、先ずはルカの 16 章からのたとえを、これもよく誤解されがちな箇所でもありますので、じっくり読んで皆さん

にお分かちしていきたいと思います。

- 1: イエスは、弟子たちにも、こういう話をされた。「ある金持ちにひとりの管理人がいた。この管理人が主人の財産を乱費している、という訴えが出された。
- 2: 主人は、彼を呼んで言った。『おまえについてこんなことを聞いたが、何ということをしてくれたのだ。もう管理を任せておくことはできないから、会計の報告を出しなさい。』  
(これは事実上の解雇宣告です。ある主人の財産を管理していたその人は、不正にお金を私的に流用していたわけですね。乱費していたとあります。浪費していたということですね。で、もうすでにそのことをとがめられて、次の新しい管理人に仕事を引き継がせるために会計報告を出しなさいと。もう事実上、解雇は決定済みであります。で、3節で)
- 3: 管理人は心の中で言った。『主人にこの管理の仕事を取り上げられるが、さてどうしよう。(もう解雇が決定していることがここからも分かります。) 土を掘るには力がないし(もう土方をするには年だし)、物ごいをするのは恥ずかしいし(ホームレスもいやだ。ホームレスが皆こじきというわけではありませんが。)]
- 4: ああ、わかった。こうしよう。こうしておけば、いつ管理の仕事をやめさせられても、人がその家に私を迎えてくれるだろう。』
- 5: そこで彼は、主人の債務者たちをひとりひとり呼んで、まず最初の者に、『私の主人に、いくら借りがありますか』と言うと、
- 6: その人は、『油百バテ』と言った。すると彼は、『さあ、あなたの証文だ。すぐにすわって五十と書きなさい』と言った。
- 7: それから、別の人に、『さて、あなたは、いくら借りがありますか』と言うと、『小麦百コル』と言った。彼は、『さあ、あなたの証文だ。八十と書きなさい』と言った。(これは勿論不正行為ですね。)
- 8: この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも抜けめがないものなので、主人は、不正な管理人がこうも抜けめなくやったのをほめた。(驚くべき言葉です。)

この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも(光の子というのは勿論、神の子どもです。クリスチャンのことです。)抜けめがないものなので、主人は、不正な管理人がこうも抜けめなくやったのをほめた。(イエスキリストのことです。主人は、この世の子らを、不正な管理人をほめたんです。びっくりしますね。ただ、ほめたのは、不正行為をほめたものではありません。よく読んで見て下さい。注意して読めば分かります。主人であるイエス・キリストが評価されるのは、不正行為ではなくて、抜け目なさです。『抜け目ない』という言葉は、『賢い』という言葉です。『賢さ』です。『不正』をほめたのではないです。『抜け目なさ、賢さ』をほめたんです。どういう抜け目なさなのか、賢さなのか、それはもうこの不正な管理人は職を失うことを分かっていた。ただ主人に貸付していた人たちの証文を不正処理して、そして彼らに有利なかたちで、要するにこの人は小麦や油を借りている人たちに対して、有利な条件を提案して、恩を売ったわけです。この不正な管理人が彼らに貸しを作ったわけです。そこでその抜け目なさが主人によってほめられたわけです。「将来自分の仕事が失うことが分かっている。でも、もうどうやって生活していったらいいか分からない。ただ、もしこのように貸しを作っておけば、きっと彼らは私のことを喜んで歓迎して、そして将来私のことを大事にしてくれるに違いない。私を家に迎え入れてくれるに違いない。私はこれで食い扶持に困らない。彼らは私に恩があるから。」つまり、この『この世の子ら』と呼ばれている不正な管理人は、将来にしっかりと備えをしたということです。そこが抜け目なさ、そこが賢さということです。この不正な管理人は将来を見通したんです。将来を見越したんです。将来に備えたんです。それが賢さですね。その点について光の子たちクリスチャンは、それに劣ると言っているんです。

クリスチャンは将来を見通せない人たちです。クリスチャンは将来を見越せない人たち。クリスチャンは将来に備えていない人たち。これは勿論老後の話をしているのではありません。蓄えをしっかりと、そして貯めたお金を投資するなりして、そして貯蓄を増やすというような話をしているのではなくて、光の子らというのは、勿論神の子らですから、その将来というのは滅びゆくこの世の将来の話ではなくて、永遠の将来の話であります。この世の子らですら、この世の中で自分たちの将来の為に、常にそれを見通し、常にそれを見越して、将来に備えてるんです。もう日本の経済がどうなるのか、クリスチャンよりもノンクリスチャンの方がはるかに研究をして、はるかに見越して、そして先手を打とうとします。勿論クリスチャンは彼らと競い合う必要はありません。むしろクリスチャンは将来、この世ではなくて天国に目を向けて、そこでの備えにもっと関心を持ち、そこでの備えに全力を尽くして備えを向けるべきであります。光の子らは永遠の将来に備えるべきです。もっと天国を意識して、天国志向で生きていくべきなんです。でも残念ながらイエスの口からは、「クリスチャンたちはそれが全然出来ていない。むしろノンクリスチャンの方がよっぽど賢いんだ」と。よっぽど抜け目ない。そのことをイエスは私たちにもチャレンジしておられます。私たちはどうでしょうか。将来をしっかりと見据えているでしょうか。来たるべき世が現実だと本当に信じているでしょうか。そしてルカ 16：9 で

9：そこで、わたしはあなたがたに言いますが、不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。

10：小さい事に忠実な人は、大きい事にも忠実であり、小さい事に不忠実な人は、大きい事にも不忠実です。

11：ですから、あなたがたが不正の富に忠実でなかったら、だれがあなたがたに、まことの富を任せるでしょう。

12：また、あなたがたが他人のものに忠実でなかったら、だれがあなたがたに、あなたがたのものを持たせるでしょう。

13：しもべは、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、または一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」

14：さて、金の好きなパリサイ人たちが、一部始終を聞いて、イエスをあざ笑っていた。

15：イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、人の前で自分を正しいとする者です。しかし神は、あなたがたの心をご存じです。人間の間であがめられるものは、神の前で憎まれ、きらわれます。」

今日は、ここで止めます。ルカ 16：1～15 をテキストにしたいと思います。この中から、お金を管理する、財産を管理する不正な管理人と呼ばれている人。この人の抜け目なさ、賢さに注目したいと思います。主人は、イエス・キリストは、不正を褒めたのではありません。そうでなくて、この人が不正な管理人であるにもかかわらず、抜け目ない、賢い、将来をしっかりと見通して見据えている、そして将来にしっかりと備えをしている、そこが素晴らしい、評価するということでもあります。私たちはどうでしょうか。光の子らの私たちは、将来をしっかりと見据えているでしょうか。そこに備えをしているでしょうか。「どうせ死んだら、天国に行くんだから。何もしなくたって、イエス・キリストを信じているだけで天国に行くんだから。それでいいです。」と言う人は、賢くありません。ハッキリ言えば愚か者です。

今からこのたとえ話を通してお金を私たちが将来の為にどのように運用すべきなのか。具体的にはクリスチャンの世界でそれは献金というかたちで行なわれることが多いですね。経済的に神様の働きに対してサポートをしたり、神様に直接ささげるいわゆる十一献金といったことも含めて、ささげるということ、

与えるということについて、お話ししたいんですけども、なぜ私たちは献金しなければいけないのでしょうか。なぜ私たちは経済的にサポート、ミニストリーに対して、教会に対して、しなければいけないのでしょうか。4つの理由を今から皆さんにお分かちしたいので、是非メモして頂きたいと思います。

第一に、ささげること、また与えることは、永遠の報いとなるからです。この不正な管理人は、それぞれ主人から油を100バテ借りた者は、50と書きなさい。小麦を100コルと書いた者には、80と証文を書き換えなさいと言って、それぞれに貸しを作って、自分が解雇されたあとは、この人たちは恩義を感じて自分を歓迎してくれるだろうと。そのように抜け目なく備えをしたわけです。私たちにもそのことが問われています。抜け目なく備えを私たちもすべきであります。私たちが預かっているお金をどのように使うのか。私たちがこの地上から解雇される日、すなわち死んだり、または携挙されて天の御国に入れられる時、あなたを歓迎してくれる人はどれだけいるのでしょうか。私たちの持っている財産、お金は、そっくりそのまま天国へは持って行けません。伝道者の書 5：10～15にも言われるまでもないことですが、聖書にもハッキリ書いてありますので、敢えて読ませて頂きたいと思います。

- 10：金銭を愛する者は金銭に満足しない。富を愛する者は収益に満足しない。これもまた、むなしい。
- 11：財産がふえると、寄食者もふえる。持ち主にとって何の益になろう。彼はそれを目で見るだけだ。
- 12：働く者は、少し食べても多く食べても、こちよく眠る。富む者は、満腹しても、安眠をとどめられる。
- 13：私は日の下に、痛ましいことがあるのを見た。所有者に守られている富が、その人に害を加えることだ。
- 14：その富は不幸な出来事で失われ、子どもが生まれても、自分の手もとには何もない。
- 15：母の胎から出て来たときのように、また裸でもとの所に帰る。彼は、自分の労苦によって得たものを、何一つ手に携えて行くことができない。

頑張っただ稼いだものも、貯め込んだものも、何一つあの世に持っていくことはできません。裸で生まれた者は、裸で死んでいくわけです。毎回毎回、火葬場でこのことを確認できます。

さらに詩篇 49：16～20もお読みします。

- 16：恐れるな。人が富を得ても、その人の家の榮譽が増し加わっても。
- 17：人は、死ぬとき、何一つ持って行くことができず、その榮譽も彼に従って下っては行かないのだ（天国にはお金も持っていきませんが、名誉も肩書も持って行けません。社長でも天国に行ったら社長でなくなり、社長でも地獄に行ったら社長ではなくなります。）
- 18：彼が生きている間、自分を祝福できても、また、あなたが幸いな暮らしをしているために、人々があなたをほめたたえても。
- 19：あなたは、自分の先祖の世代に行き、彼らは決して光を見ないであろう。
- 20：人はその榮華の中にあっても、悟りがなければ、滅びうせる獣に等しい。

これが現実であります。アンドリュー・カーネギーという大富豪がいました。カーネギーホールとか聞いたことがあると思いますね。そうした様々な素晴らしい施設や設備、建造物。いろんな分野でカーネギーの名前がつくものがありますが、この人は大富豪でしたけれども、死んだ時あるレポーターの記者が、カーネギーの息子に質問したそうです。「あなたのお父さんは一体どれくらい残してくれましたか。」息子は

笑いながら答えました。「すべてです。何もかも残しました。」意味するところは、人はどんなに稼いでも貯め込んでも結局はあの世には一銭たりとも持って行けないということです。死んだら全部残すことになります。お金はあの世には持って行けないんです。地獄の沙汰も金次第は、真っ赤な嘘です。お金は持って行けません。天国にも持って行けません。ただし、今私たちがテキストにしているルカの16章から教えられることは、確かにこの地上で得たものは天国に持って行けませんが、しかしこの地上で手にしたもの、稼いだもの、貯めたものは、実は天国に前もって送金できるということです。御国建設のためにあらかじめ投資できると言っているんです。天国銀行に入金できるんです。死んだら一銭も持って行けませんが、死ぬ前だったら私たちは、いくらでも天国にお金を、あなたのもっている財産を投資できるんです、送金できるんです。ただお金という話を聞くと、多くのクリスチャンたちは、それはあまりにも生々しくて、悪いイメージ、否定的なイメージを持ってしまうかもしれません。確かに聖書の中ではお金はあまり良いものとして必ずしも描かれていないということも知っております。I テモテ 6 : 9~10 にこう書いてあります。

**9 : 金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。**

**10 : 金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました。**

金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。すべての悪の根と言っていいわけですね。この世におけるすべての悪の根っこは、金銭を愛することからきています。聖書は断言しています。でもイエスはたとえ話の中で不正の富を使いなさい。『不正の富を用いて自分の友をつくりなさい』と、言っています。矛盾するように聞こえますね。ルカ 16 : 13 では

**13 : しもべは、ふたりの主人に仕えることはできません。神にも仕え、また富にも仕えるということではできません。**

とも言われました。どのように私たちはこの富について整合性を持たせて、バランスを持って理解すべきなのでしょう。一方では、お金を愛することはあらゆる悪の根である。確かにそれは否定できません。イエスも今読んだところでも、『人は神にも、富にも』とあるように、『富』というのは『神』と同列に並べられるほど、パワフルなものなんです。お金に多くの人は魅了されます。お金にとりつかれます。これが、聖書が教えるお金の実態です。お金はただの物質ではありません。ものじゃないんです。紙切れじゃないんです。コインじゃないんです。ニッケルや銅じゃないんです。お金は、実は神様と並べられるほどに霊的な力を秘めている。そのお金の背後には、実は悪の霊の力が非常にアクティブに働いているということを教えられます。だからお金を愛することがあらゆる悪の根になりますし、だからお金は神様と二つ並べられて、『どっちにも仕えることはできない』と、言われるほどパワフルなものだということです。お金は人々を魅了して、支配して、人の人生を振り回して、最後には破滅をもたらします。破壊的な活動を行います。『神にも富にも』と使われているその『富に』という言葉の原語は、『mammonas (マモン)』と言います。『マモン』というのはもともとアラム語から来ていて、英語の”money”の語源です。アラム語で言う『マモン』というのは、実は富の神様、お金の神様の呼び名でもあったんです。『マモン』はお金の神、偶像の名前でありました。『マモン』という神は、お金をつかさどる神。他にも聖書には例えば『バアル』という偶像がありますね。『バアル』というのは、人の権力、人の知識。「学歴さえあれば、良い大学さえ

卒業できれば、この肩書があれば、この資格があれば、人生で成功ができる。ありとあらゆる権力を手にできる。」そうした人たちの欲望をそそり、正当化するのが、『バアル信仰』であります。『アシュタロテ』という女神がおりますが、それは豊穡と欲情の神です。セックスの女神です。「とにかく女性をものにできれば、男をものにできれば、それで私は幸せになれます。」性的倒錯にふけっていきます。そこに満たしを求める。それは『アシュタロテ信仰』であります。お金を拝む信仰、拝金主義、これは『マモン信仰』なんですね。確かにお金にとりつかれます。それはまるで悪霊にとりつかれるようにです。パウロはすべての偶像の背後には、悪霊があるとも指摘しておりますね。偶像礼拝は、すなわち悪霊との交わりであるというふうに、パウロは指摘しております。ですから、お金には常にこの悪霊の力が背後に働いているということクリスチャンは、認めなくてはいけません。大変危険なものなんです。でも、にもかかわらずイエス・キリストは不正な富で自分の友をつくりなさいと。もう一度ルカ 16 : 9 に目を戻してください。

**9 : ところで、わたしはあなたがたに言いますが、不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。**

どうやって不正の富で友をつくるのでしょうか。『不正の富』というのは、“この世の富”と言い換えることができます。不正とこの世というのは、この 16 章の中では同じ言葉、同義語として使われています。『この世』と『不正』、これは同じ意味の言葉です。どうやって不正の富で自分ために友をつくることができるのか。それは、このお金によってあなたを支配させないことによってです。お金は常にあなたをコントロールしよう、あなたにとりつかうとします。それをさせないことによって、あなたは自分の友をつくることができます。それが先ほど触れた、「地上の蓄えを、あなたの財産を、あらかじめ天国に送金しなさい。天国銀行に入金しなさい。御国建設に投資しなさい。」と言った訳です。そして、それらは天国でしっかりとキープされます。キープされるどころか、そこでは莫大なものに増えています。これを聞いて、皆さんの中には、「それがどうした。」という人もいるかもしれません。「死んだ先の話なんかどうだっていいです。今私が知りたいのは現世でどれだけお金を儲けることができるのか、どれだけこのお金で幸福を享受するのか、そこにしか私は関心がありません。」今そう思っている人は、クリスチャンの中に、もしそういう人がいるならば、その人は死んでから、天国に行ってから絶対後悔します。「こんなに素晴らしいものが私のために用意されていたなんて。私の天国に送ったお金なんてはした金でした。」なかにはなけなしのお金でしたけれども、それでも主にささげて主に用いて頂きたい。ほんの少額だったのに。ところが天国に行ってみたらとんでもないことになっています。あなたは、天国では億万長者です。信じられないような祝福があなたを待っております。ですから、天国に行けばあなたは必ず、びっくりするはず。圧倒されると思います。天国の国債を今のうちに買って置いて下さい。ものすごいことになりますから。お勧めしたいと思います。不正の富をもって、この管理人は、主人に、『抜け目ない者だ』と褒められるような扱いをされました。将来を見越して、見通して、将来に備える、そういう賢い行いをしたわけ。光の子たちも見習いなさいと言っています。天国で報われるんだということ、そこがあなたを待っている将来だということ私たちは本気で信じなければいけません。この世は終わるんです。この世での仕事から私たちはいつか解雇されます。先ほど 1 テモテ 6 章を開いて頂きましたけれども、17~19 節も読ませて頂きたいと思えます。

**17 : この世で富んでいる人たちに命じなさい。高ぶらないように。また、たよりにならない富に望みを置かないように。むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。**



18：また、人の益を計り、良い行いに富み、惜しまずに施し、喜んで分け与えるように。

(注目して頂きたいのは 19 節)

19：また、まことのいのちを得るために、未来に備えて良い基礎を自分自身のために築き上げるように。

『まことのいのちを得るために、未来に備えて良い基礎を自分自身のために築き上げるように。』これこそがまさにイエスが語られた抜け目なさです、賢さです。将来を見通し、見越し、将来にしっかり備えをしている。今から天国にドンドンじゃんじゃん送金していく。ささげるということは、与えるということは、分かち合うということは、献金をするという事は、永遠の報いとなるということ。だから私たちは大いに、積極的に、ばらまくんです。ドンドンじゃんじゃんささげるんです。この世で報われるためではありません。あの世で報われるためです。それは聖書が説く健全な理由です。目的でもあります。

で、2 番目のポイントとして、何故私たちは与えるべきか、分かち合うべきか、ささげるべきか、献金すべきか。2 番目の理由は、与えることはミニストリーの拡大となるからです。献金することは、ミニストリーの、神の働きの、拡大となるからです。ルカ 16：10～12 を読ませて頂きます。

10：小さい事に忠実な人は、大きい事にも忠実であり、小さい事に不忠実な人は、大きい事にも不忠実です。

11：ですから、あなたがたが不正の富に忠実でなかったら、だれがあなたがたに、まことの富を任せるでしょう。

12：また、あなたがたが他人のものに忠実でなかったら、だれがあなたがたに、あなたがたのものを持たせるでしょう。

私たちには沢山の富が任せられています。これは勿論お金だけではありません。この世で生きる上で必要なもの、大切なもの、あなたの祝福となるものですね。で、私たちには、神様の働きも担うように必要が備えられています。ただ神の働き、ミニストリーと言っても、例えば私のようにすべての人が説教できるわけではありません。または、すべての人がワーシプリーダーとなって美しい歌声をもって、また巧みに楽器を奏でることをもって、神様をたたえる。そして多くの会衆たちを神の臨在に引き入れる、そういうミニストリーをすべての人が行えるわけではありません。それは、ごく一部の選ばれた、召し与えられ賜物が与えられた者たちの働きです。残念ですけども全員が全員、同じことができないんです。ただし、一つだけ全員が全員、同じことができる神の働き、ミニストリーがあります。もう分かったとおもいますが、すべての人には説教の賜物は与えられてません。すべての人には賛美の賜物が与えられていないかもしれませんが、すべての人にはお金が与えられています。勿論金額には差があるとは思いますが。でも全員が全員、お金を持っています。共通している点ですね。もしあなたが神様にもっと仕えたい、神様の働きに預かりたい、もっと用いて頂きたいと願うならば、あなたは今持っているそのお金をどう神様の為に用いるのか、神様にあなたの持っているお金を託せるだろうか。これがテストです。

『小さい事に忠実な人は、大きい事にも忠実であり、小さい事に不忠実な人は、大きい事にも不忠実です。』今あなたの財布に入っているお金をどう神の為に使うのか。それが出来ないならば、そこで出し惜しみをしようであるならば、あなたにはいつまでも大きな働きは任せられません。D・L・ムーディーという偉大な伝道者は、「人の霊性を量るには(その人がどれだけ霊的なのか、スピリチュアルなのか。その度合い、霊性の深さを量るには)、一番手っ取り早い方法がある。」といました。それはその人の帳簿を、家計簿を見ることです。どういうお金の使い方をしているのか。それがそのままクリスチャンの霊的コンディシ

ョンをあらわす、その人の霊性がそこに如実にあらわれるということです。神様から頂いているお金をあなたは何のために使っているのか、どのような優先順位で運用しているのか。それを見れば、その人がどれだけスピリチュアルなのか、霊的なのかは一目瞭然だと言っているわけです。私たちはいくらでも誤魔化せます。教会生活を通して、いかにも自分が霊的な敬虔なクリスチャンであるか、目に見える奉仕をしたり、礼拝などに足繁く出席することで、祈り会に出てみたり、いろいろな奉仕活動をして、いくらでも私たちは自分の霊性、スピリチュアルの度合いを人にアピールできます。でもそれは見せかけでもありません。絶対に誤魔化せないところは、あなたが普段神様から預かっているお金をどのように、誰に対して、何のために、どういう優先順位で使っているのか。それで一発で分かると言っているわけです。これ以上確かな秤は無いということです。皆さんの帳簿、家計簿、または銀行の口座。どういうところにそれらのお金が行っているのでしょうか。何のために、そのお金が引き出されているのでしょうか。それで分かるんです。一番使われているもの、それがまさに一番大事にしているものです。

勿論額ではないと言いました。「私はそんなにいっぱいお金を稼いでいないんです。」神様はお金の額のこととは特別問題にはしておりません。むしろ神様は、あなたが持っているもので、それに応じてどれだけ神様の栄光のために、それらを使うのか。教会に直接お金を持ってくることが、勿論すべてとっているわけではありません。神様の栄光をあらわすために使うものです。神様が恵み豊かな方、素晴らしい方。それを私たちが、また人が味わえるならば、それで神様の喜ばれる使われ方がなされているということでもあります。ですから一切ですね、お金を自分の楽しみのために使ってはいけないと言っているわけじゃありません。でもその楽しみは、神様をほめたたえるためのものであるならば、大いに使っても構わない。むしろ先ほど読んだテモテの箇所でもあったように、神様はエンジョイしてもらいたいと言っているわけです。ただそのエンジョイは私欲を満たす、我欲を満たす、快樂にふけるための勿論目的ではなくて、神様を楽しむための目的であります。主にもっと仕えたいと思うならば、もっと与えること、分かち合うこと、ささげることが、真っ先に求められます。これはすべての人が出来ることです。すべて人が説教できるわけじゃありません。すべての人が宣教師としてどこか未開の地に行くことが出来るわけじゃありません。でもすべての人にはお金が与えられています。そしてすべての人は、お金を使ったミニストリーを行うことが出来るんです。これは特権ですね。

で、3番目の理由として、お金を与えること、またあなたの持っているものをささげること、分かち合うことは、現世におけるあなたの経済保障となります。与えれば与えるほど、あなたの経済基盤は、<sup>ばんじゃく</sup>盤石なものになります。献金すればするほどあなたの経済生活は安定します。心配は無くなります。恐れは無くなります。不安は無くなると言ってるんです。「本当ですか。献金したら、お金無くなるじゃないですか。」と思うかもしれませんが。ここで**12節**を見て下さい。注意深く読んで欲しいと思います。

また、あなたがたが他人のものに忠実でなかったら、だれがあなたがたに、あなたがたのものを持たせるでしょう。(ルカ 16 : 12)

『他人のもの』とあります。私たちは、『自分のお金』と思います。『私のお金』と思います。勿論ここで言っているのは、「すべてのお金は主のもの」これは大前提です。そのことは、例えば**箴言 10 : 22**にも書いてある通りです。

主の祝福そのものが人を富ませ、人の苦勞は何もそれに加えない。(箴言 10 : 22)

「いや、私は頑張って受験勉強して、六大学に入学して、そして卒業して、立派な名だたる上場企業に就職出来たんです。で、私はそこでも頑張って、他を抜いて、昇進したんです。私の苦勞が今の富を築いたんです。私が頑張ったからマイホームが買えたんです。」うそです。『主の祝福そのものが人を富ませ、人の苦勞は何もそれに加えません。』

で、申命記 8 : 17,18 にもこう書いてあります。

**17 : あなたは心のうちで、「この私の力、私の手の力が、この富を築き上げたのだ」と言わないように気をつけなさい。**

(一生懸命ハローワークに通って見つけた仕事なんです。)

**18 : あなたの神、主を心に据えなさい。主があなたに富を築き上げる力を与えられるのは、あなたの先祖たちに誓った契約を今日のおりに果たされるためである。(申命記 8 : 17,18)**

あなたが足繁くハローワークに通うことができるのはだれのおかげですか。健康も主が与えたものです。命も主が与えたものです。太陽も空気も水もただじゃありません。全部主の恵みです。そして仕事を与えられるその機会、チャンスも主が備えたものであります。能力も才能も天賦のものも、何もかも主から来たものです。なのにあなたは自分の力で富を築いたんだと。そうじゃありません。主の祝福そのものがあなたを富ませるんですね。それは大前提ですけれども、ただ特にルカ 16 : 12 にある『あなた方が他人のものに忠実でなかったら』の『他人のもの』というのは、むしろこれは神様のものということです。私たちの持っているお金の中には、私たちが自由に使って良いものと、神様にのみ帰せられるものがあります。私たちが預かっているお金の中には、私たちが自由に使って良いお金と、私たちが好きにってはならない、これは私たちの所有とならない部分があるということを、私たちは知らなければいけません。この他人のものというのは、ですから結論から言いますと、具体的に言いますと、十分の一であります。私たちの収入の十分の一は、他人のもです。神のもです。私たちのものじゃありません。十分の一に手をつけるということは、人のものに手をつけると同じことです。箴言 3 : 9 でこう言っております。

**あなたの財産とすべての収穫の初物で、主をあがめよ。(箴言 3 : 9)**

『収穫の初物』とあります。この初物というのは、十分の一のことです。十分の一は神様のものです。それを神様にお返しすることで、神様をあがめるようにという勧めであります。十分の一が神のものであるということは、ハッキリとマラキ 3 : 8 に書いてあります。そちらを是非開いて見て下さい。

**8 : 人は神のものを盗むことができようか。ところが、あなたがたはわたしのものを盗んでいる。しかも、あなたがたは言う。『どのようにして、私たちはあなたのものを盗んだでしょうか。』それは、十分の一と奉納物によってである。**

初物は、私たちの収入の十分の一は、10%は、神のもです。多くの人はいろんな見解を持ちます。収入の十分の一とはどういう算定の仕方でしょうか。税金や保険や積立金や諸々のものを引き落として、残ったものの十分の一ですか。そう解釈する人もいます。必要経費を抜いて、自由に使える分の中の十分の一ですか。小遣いの中の十分の一ですか。いろんな見解がありますけれども、ハッキリ一つ分かっていることは、初物、それで終わりです、話は。初物です。差し引くも何もないですね。もう、残り物じゃな

くて、初物です。それ以上は言いません。皆さんで判断して下さい。そして十分の一は神様のものですから、もしあなたが十一献金を主にささげなければ、あなたは他人のものを私的流用している。私のものではないものを勝手に自分の必要のために使っている。「いや、今月は経済難なんです。とても十分の一なんか無理です。ですから今回は十分の一はこのことのために。子供に送金したいです。」とか、「このローンに充てたいです」とか、「急な出費があったんです。今回は十分の一はこのことのために使います。またいつか埋め合わせをしたいです。」それはあってはならないことです。それは盗みです。困っているからと言って、あなたは人のお金に手を出すでしょうか。あり得ないことですね。「どうしよう。今月は支払い、困ったな。」お店のレジから千円抜き取る。「どうしよう。今月困ったな。」実家に行って親の財布からお金を抜き取る。「どうしよう。困ったな。」銀行強盗する。あり得ないことですね。必要があるからと言って他人のものに手をつけるということは、立派な犯罪であります。十分の一献金にしても例外ではありません。十分の一というのは、この後読んでいきたいと思いますが、**マラキ 3 : 9**。

**9 : あなたがたはのろいを受けている。あなたがたは、わたしのものを盗んでいる。この民全体が盗んでいる。**

マラキの時代のイスラエルの民は、十分の一献金をしていなかったんです。この民全体が盗んでいる。そして 10 節に

**10 : 十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしをためしてみよ。一万軍の主は仰せられる—わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。**

“十分の一”と“奉納物”という言葉があります。これは別物です。“十分の一”は初物と呼ばれるもので、とにかく純粋に収入の中の 10%ということです。それは宝物倉にまず納められとあります。これはまさに神様に直接ささげられるものです。一方、奉納物というのは主の宮に関するだけでなく、例えば個人個人の必要のため。貧しい人たちのためにそれを分配するとか。必要な神の働き、ミニストリーのためにそれを充てるとか。ただ十分の一については、これは全部一括で同じ場所に、宝物倉に納められます。これは神のお金ですから、手を付けてはいけないお金として、神様に直接ささげられるものです。奉納物はそこから、まあこれは強制というよりも、そこから個人の必要に充てたり、ミニストリーの必要に充てたり、そういうことのために使われるものであります。ただ中には「十分の一、これは律法じゃないですか。律法主義を押し付けしないで下さい。私たちはもう新約の時代ですから、十分の一みたいな律法に縛られる、そんな覚えはありません。」ただ結論から言いますと、十分の一だけイスラエルの民は神様にささげていたのではありません。律法を細かく学べば、最低でもイスラエルの民は十分の三は、30%以上は、全収入から主にささげていたわけです。でも十分の一だけでいいと、主は言うわけです。で、それは律法ではないんです。律法の前から十分の一は主に直接ささげられておりました。たとえば**創世記の 14 章**に見られるアブラハムがシャレムの王（これはエルサレムのことですが）、エルサレムの王様のメルキゼデクといういと高き方の大祭司に十分の一をささげております。**創世記 14 : 20**、後でこの箇所を開きますので、そのとき確認して頂きたいと思います。アブラハムというのは勿論モーセの前ですから、律法の前です。律法が入る前に、律法に規定される前から十分の一献金は存在していたんです。他にも**創世記 28 : 22**に、アブラハムの孫のヤコブという人がやっぱり十分の一を主にささげています。これもモーセのはるか前の話ですから、律法以前の話です。十分の一献金は律法に先んじていたということです。さらに加えて

言うならば、新約にも十分の一の教えがあります。これは他ならぬイエスの教えです。ルカ 11 : 42 にこう書いてあります。マラキの方には指を挟んで頂いて、参照したいと思います。

**42 : だが、わざわざいだ。パリサイ人。おまえたちは、はっか、うん香、あらゆる野菜などの十分の一を納めているが、公義と神への愛はなおざりにしています。これこそしなければならぬことです。(その後が大事なポイントですね。) ただし、十分の一もなおざりにしてはいけません。**

イエスの言葉です。「ただし、十分の一もなおざりにしてはいけません。」と、イエスの口からハッキリ語られています。イエスは十分の一献金をするをなおざりにするなどと言っています。ですからこれは新約の教え、他ならぬイエス・キリストの教えです。

で、パウロも**第1コリント 16 : 2**で教えています。

**2 : 私がそちらに行ってから献金を集めるようなことがないように、あなたがたはおのおの、いつも週の初めの日に (いつも週の初め・日曜日に)、収入に応じて、手もとにそれをたくわえておきなさい。**

ここには特別“十分の一”という数字は、規定はありません。ただ“収入に応じて”というフレーズは、これは初代教会の使徒たち、並びにその弟子にあたる教会教父と呼ばれるチャーチ・ファーザーと呼ばれる人たちは、この“収入に応じて”というフレーズは、間違いなく“収入の十分の一”を指すという解釈を伝統的にしてきました。ですから新約時代において、イエス・キリストも十分の一献金のことを説き、それを勧め、そしてパウロという人も、使徒もまた十分の一の献金は、これは毎週集められるもの、日曜日毎に十分の一が集められたという事実。総合してまとめて言うならば、十分の一献金というものは、律法前から存在しており、イエスの口からも奨励され、そしてパウロの書簡からも裏付けられ、そしてパウロ以降の教会教父たちによっても、このことは毎週十分の一献金が教会でささげられるべきこととして、伝統的にそのことが完全に教会の習慣となっていたということが言われています。ですから教会史においてもチャーチヒストリーにおいても、十分の一献金というのはもう教会にとっては当たり前の話、当然のこととして既に説かれていたわけです。ですから今になって「いや、十分の一は、これは律法の教えです。私たちはもう律法に縛られていないのですから、自由にすべきです。5%だっていいじゃないですか。」そんなことはありません。**マラキ 3 : 9**のところで、十分の一、これををささげないのは、神のものを盗んでいるということで、そうするものはのろいを受けているとあります。**マラキ 3 : 9**にはのろいを受けるとあります。具体的にはどのようなのろいかというと、これは**ハガイ 1 : 3~4**にあります。

**3 : ついで預言者ハガイを通して、次のような主のことばがあった。**

**4 : 「この宮が廃墟となっているのに、あなたがただけが板張りの家に住むべき時であろうか。**

で、それを受けて9節、10節。

**9 : あなたがたは多くを期待したが、見よ、わずかであった。あなたがたが家に持ち帰ったとき、わたしはそれを吹き飛ばした。それはなぜか。—万軍の主の御告げ—それは、廃墟となったわたしの宮のためだ。あなたがたがみな、自分の家のために走り回っていたからだ。**

自分の家計のために。もう火の車だから、あちこちから稼いで、仕事をもらってきて、何とか自分の家

をやり繰り返すと。

## 10：それゆえ、天はあなたがたのために露を降らすことをやめ、地は産物を差し止めた。

とあります。リビングバイブルですと、この部分を『収入はまるで底の抜けたポケットに入るようにすぐになくなってしまふ。』と表現しました。そういうイメージで良いと思います。給料を持ち帰ったけれども、あっという間にいろんなものにそれが使われてしまった。すっ飛んでしまふ。それはまるで穴の開いたポケットに一生懸命お金を詰め込んでいるんですが、詰め込む先からお金がポロポロ落ちて何も残らないという状態です。これが呪いです。十分の一に手をつけると、こうなるんです。稼いでも稼いでも全然満たされない。稼いでも稼いでも結局ポケットの穴からどんどん落ちていって、いつまでもあなたは奔走しているわけです。やりくりのために一生懸命走り回って頭を下げたり、または就職活動するなり、アルバイト・パートを探すなり。

テキストに戻って頂いて、マラキ 3：10。『十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしをためしてみよ。』宝物倉に持って来るということは、これは、だれがいくらいくら献金したという事実が判明しないという利点があります。十分の一というのは原則無記名でなされるべきです。ある教会では、封筒に自分の名前を書いて、十一献金用の袋があつて、そこにお金がきっちり計算されたものが入ってます。単純に考えればそれが十分の一ですから、その人がどれくらい給料をもらっているか簡単に分かります。でも本来は、十分の一というのはもう全て一括して宝物倉に納められる。それは間違いなく無記名、間違いなく匿名で、だれがいくらささげたか誰にも分からない形になる。ノークレジットということです。だれにもクレジットが着せられない。この人はいくらいくら献金しましたということが、誰にも明かされない、誇りとされないということです。これが原則です。ただ一部の教会では、「今〇〇さんはいくらいくら献金しました」とか、週報にそれぞれ個人の献金の額まで芳名まで出ています。「このミニストリーのためにこの人はいくらささげました。」私はそれはいかがなものかと思います。私のところにもしょっちゅう“献金のサポートのお願い”というのが来ます。メールでも来ますが、ダイレクトメールのようにして来ます。そしてそこには、「〇〇さんが、××教会がいくらいくらこのミニストリーのために献金しました。」その芳名と金額まで書いてあるものすらあります。あつてはならないことだと思います。主にささげる。宝物倉に持っていくということは、主にささげるということです。誰それにささげるというものではありません。一方で、奉納物というのは別物です。十一献金とは別物です。そこを区分けする必要があります。どの教会でも結構です。クリスチャンは十分の一をささげるべきです。自分が養われている教会、そこへささげるべきです。MGFにささげなければいけないとは言いません。ただ主によって養われているならば、あなたはそこの教会に十分の一を持っていくべきであります。そしてあなたはささげたならば、あなたのものではないです。奉納物もそうですけれども、もうそれはあなたの手から離れたわけですから、それを返してもらいたいとか、それを私の願望通りに使ってもらいたいとか、そうでない場合は返してくださいとか、そういう話ではありません。主にささげたものについては、主が好きに使います。「私は十分の一をささげているけれども、こういうことに使ってもらいたいんです。こういう働きに運用してもらいたいんです。」それは言うべきことではありません。すべての十分の一は、宝物倉に全部一括して主に対してささげるという形になりますので、後は主が好きのように使います。ささげたものは、もうその手からそのお金は離れているので、しかも十分の一に限っていうならば、それはもともとあなたのものではないのですから、なぜあなたは十分の一について使途目的まで、「何のために使うのか、こういうことに使ってもらいたい、こういうことにつかってもらいたくない」とか、そんなことを意見する立場にもないということです。多くの人はこの点を誤解しているので、敢えて言わせて頂きました。

奉納物については明記して構いません。これはこのことのために使って下さい。それは構いません。これは牧師の個人のために使って下さいとか、構いません。是非このミニストリーのために使ってもらいたいとか、それは奉納物としては構いませんが、十分の一は別物ですから気を付けて下さい。「私はこのミニストリーのためにささげたので、もう十分の一はそこに入ってますから。」それは違います。十分の一は十分の一です。全く別ということです。これを混同している人がいます。「私は教会のこのために、教会で冷蔵庫を買いますからそのために使って下さい。」で、それで自分はもう十分の一をささげたつもりの方がいますが、それは別物であります。十分の一は何かの目的のためにささげるんじゃないで、主にお返しするためでありますから、何かの目的のためにつかうならば、それは奉納物として別枠でささげるという必要があります。で、『**ためしてみよ**』という言葉が**10 節**にあります。これは驚くべき言葉です。神様が唯一、例外的にと行って良いと思います。『**私をためせ**』というのはここだけです。基本的には私たちは神様をためてはいけない立場です。主をためてはなりません。イエス・キリストもサタンの誘惑を受けた時に、ハッキリ言いました。**主をためてはいけません**、基本的には。ただ例外的に、ここだけ、要するに十一献金に関してだけ例外的に神様の方で「**私をためなさい。テストしてみなさい**」と。これ以外のことはテストしないで下さい。でもこれだけはテストしても構わないと言ってるんです。驚くべきことですが、十分の一をささげることについて、あなたは、私は、主をためていいんです。これ以外は駄目です。

ためすとどんなことがあるのかということも、この後、主は予め私たちに教えてくれております。素晴らしい約束です。「十分の一はわたしのものだから手を付けてはならない。私的流用してはならない。それは盗みと同じだ」と。十分の一をささげない者は、世界一の、宇宙一の大泥棒です。どこそこの公務員がいくらいくら公共のお金を着服したとか、銀行で何億円横流ししてとか、そういったものは全く自分たちとは関係ないように、とんでもない犯罪者だと、折角集めた義援金を、募金箱を盗むなんてとんでもないやつだと皆さん思うかもしれませんが、それ以上にとんでもないのは十分の一献金を自分のものとして使うことです。東日本大震災の本当に困っている人たちのためにみんなが集めた志を盗む。とんでもない悪人だと思うかもしれませんが、そんなものは全く比べようがないほどに悪い行為。これが献金を、十分の一献金をささげないという行為です。でも神様は、「**わたしをためしてみなさい。ためしに十分の一献金をわたしにささげなさい**」と言ってます。そうすれば、この中に3つのことを主は約束されました。

一つは想像を絶するような祝福を与えると。**10 節**のところに『**わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。**』箴言 **11 : 24** にこう書いてあります。

**24 : ばらまいても、なお富む人があり、正当な支払いを惜しんでも、かえって乏しくなる者がある。**

ばらまいても、なお富む人がいます。十分の一を主にささげてみてください。でも正当な支払いを惜しむ、究極的には正当な支払いとは十分の一です。これ以上正しい支払いはこの世には存在しません。それを私たちが惜しむならば、かえって乏しくなる者がおります。でも、もしあなたが十分の一を惜しみなく、「これは私のものではありません。これは主のものであります。これに手を付けるなんてとんでもないことです。これ以上の悪はありません」と、心底願うならば、信じるならば、結果的には主は天の窓を開いてあなたが想像もしたことがないような祝福が与えられます。勿論私はこれをご利益で教えているのではありませんが、ただこれが神の約束です。必ずしもそれはお金という形の祝福ではないかもしれません。例えば「10万円、十分の一献金ささげました。その人は勿論 100万円もらっている人です。10万円ささげたらそれが10倍、何十倍になって一千万円になって返ってくるんですか。」そういった話をしているのではありません

ん。「一億円位になって返ってきたら、いくらでも献金しますよ」という人がいるかもしれません。でもハッキリ言わせていただきますが、そんなあなたが想像するようなものじゃないと言ってるんです。一億円どころの見返りではないと言っているのです。天の窓ですからね。想像ができないほどの祝福があなたに注がれるという約束です。

で、2番めの約束として、これは**11節**の

**11：わたしはあなたがたのために、いなごをしかって、あなたがたの土地の産物を滅ぼさないようにし、畑のぶどうの木が不作とならないようにする。——万軍の主は仰せられる——**

“いなご”という言葉は欄外に※印がついていて、直訳は『食う者』です。食う者とは、ここでは畑なので意識で“いなご”となっています。食い尽くすものという言葉です。ただ直訳は『食う者』です。この『食う者（食い尽くす者）』と言えば、勿論皆さんはお分かりだと思います。それは『サタン・悪魔』です。私達の敵、悪魔はまさに食い尽くすべきものを捜し回っている獅子・ライオンと言われてます。

**第1ペテロ 5：8**にこう書いてあります。

**8：身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。**

ですから、ここで言われている“いなご”又は“食い尽くす者”と言うのは、悪魔のことです。そしてその悪魔はあなたが十分の一をささげることによって、「主がしかりつける」と言っているわけです。もしあなたが十分の一をささげるならば、サタンは追いやられます。食い尽くすべき者は、主によって叱られて、そしてあなたにはもう近寄れなくなります。そしてあなたは、この悪魔から、敵から、守られると言っているわけです。これが十分の一献金もたらす祝福です。あなたは悪魔から守られます。誘惑からも守られます。とにかく悪魔はあなたを食い尽くしたいと。もうそのことしか頭にありません。とにかくあなたに危害を加えたい。あなたの人生を不毛の人生にしたい。実り豊かな人生ではなくて、何もかもあなたから奪い去りたいと思ってます。でもあなたがもし十分の一献金を惜しむならば、ささげないならば、神のものを盗むならば、この守りは期待できないと思って下さい。十分の一を我が物とする者は、サタンと同じであります。自分の領分をわきまえなかったサタンと同じです。実際にこういうことが経験上私たちにはあるかもしれません。十分の一献金を惜しんだばかりに、それを自分のニーズに充ててしまったばかりに、いろいろな出費が急に増えるということもあります。十分の一献金をしなくなった途端に、車が壊れた、冷蔵庫が壊れた、急な出費が増えた、子供がなにかこういうことで必要がでてきたとか。結局、十分の一を惜しみ始めたばかりに、どんどんあなたからはお金が流れて、お金がどんどん他へ渡って行って、手元にどんどんあったものが減っていく、なくなっていくという。それが呪いであります。

で、3つめの約束として、**マラキ 3：12**に『すべての国民は、あなたがたをしあわせ者と言うようになる。あなたがたが喜びの地となるからだ』と**万軍の主は仰せられる。』**これは、もうまさにあなたは十分の一献金をすれば、しあわせ者となる、幸福になる、喜びがあふれる、と言っているわけです。幸せはお金では買えません。喜びもお金では買えません。お金で買える喜びは、お金が無くなれば尽きてしまうものです。でもこの喜びは、何があっても失われない喜び。この幸せも何があっても奪われない幸せです。これが十分の一献金によって間違いなくあなたにもたらされると、神が約束したものですからためしてみ



て下さい。あなたは今、金欠でしょうか。アップアップ状態でしょうか。もうローンの支払が、とか。税金すら払えません、とか。いろいろな立場があるかもしれません。仕事がないんです。給料が減りました。急な出費で。それでも十分の一を主にささげてみてください。『わたしをためせ』、とされています。そうすれば必ず想像を絶するような祝福があなたに与えられます。そうすれば必ずあなたには守りが与えられます。そうすればあなたには、幸せ、喜びが備えられます。

最後に、これは“ささげる、与える、献金する、分け与える”その理由、根拠について、今全部で3つのポイントを挙げてきました。

で、最後のポイントは4つ目なんですけれども、これは非常に重要なものです。オリジナルのテキストのルカの福音書16章に戻って下さい。ルカ16:13を見て下さい。これは本当に大切なポイントです。

**13: しもべは、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、または一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということとはできません。」**

『ふたりの主人に仕えることはできない』とあります。ここでの、4番目のポイントは、もしあなたが神という本物の主人に仕えることが出来るならば、すなわち、この方のためにささげることが出来る、この方の働きのために自分の持てるものを投資する、分かち合うことができるならば、あなたは主人のようになるということです。これは、与えることは、あなたの人格を変貌させるもの、人格変貌のため、あなたのパーソナリティも与えることによって変わると言っているのです。どうしてそういうことが分かるのか。創世記14章、先程も触れたところですが、アブラハムという人が甥のロトを敵から救出する場面があります。甥のロトはソドムの町に住んでいて、ソドムの町や周辺は、敵の手に落ちて、ロトの家族も敵の捕虜となってしまいました。そのニュースを聞いたアブラハムは自らのしもべたちを、精鋭を集めて、甥のロトの救出に出るわけです。創世記14:18から今の背景を踏まえて読んでいきたいと思います。

**18: さて、シャレムの王（これはサレムとも言うエルサレム古い呼び名です。）メルキゼデク（意味は義の王です。このシャレムの王メルキゼデクについては、ヘブル書にも出てますので、ヘブル書5章、7章といったところ。メルキゼデクのこと書いてあります。で、それらによるとメルキゼデクは初めもなく終わりもない者。このメルキゼデクはいと高き方の祭司。そしてエルサレムの王。名前の意味は”義の王”ですから、結論から言うとメルキゼデクとは受肉前のキリスト、そのものであるということです。キリストの雛形という解釈もありますが、私はメルキゼデクというのは父も母もない、その系図においては初めも終わりもない、そういう者ですので、このメルキゼデクは受肉前のキリスト、その方であると。ですからアブラハムは今、イエス・キリストに会っているというイメージで良いと思います。そこで、メルキゼデクは) パンとぶどう酒を持って来た。彼はいと高き神の祭司であった。**

**19: 彼はアブラムを祝福して言った。「祝福を受けよ。アブラム。天と地を造られた方、いと高き神より。**

**20: あなたの手に、あなたの敵を渡されたいと高き神に、誉れあれ。」アブラムはすべての物の十分の一を彼に与えた。**

と。アブラムは十分の一をシャレムの王メルキゼデク、イエス・キリストにささげたわけです。で、メルキゼデクの方では、パンとぶどう酒を持って来ました。これはもうピンと来ると思います。当然これは聖餐式ということです。アブラハム、アブラムは、このメルキゼデクにささげたわけですから、これはた

だの祭司ではないということです。人間には十分の一は与えません。神様に対してささげるものですから、人間のものであって人間ではない。神です。イエス・キリストとはまさに100%神であり、100%人であり、イエス・キリストは神と人との間に立つ大祭司、そして王の王、主の主でもあります。

で、一方で**21節**から、

**21**：ソドムの王は（ロトが住んでいたソドムの町の支配者です。彼も捕虜となっていたんですが、アブラハムがロトを助けるついでに捕虜から開放されたわけです。そのソドムの王は）**アブラムに言った。**

「人々は私に返し、財産はあなたが取ってください。」

**22**：しかし、アブラムはソドムの王に言った。「私は天と地を造られた方、いと高き神、主に誓う。」

**23**：糸一本でも、くつひも一本でも、あなたの所有物から私は何一つ取らない。それは、あなたが、『アブラムを富ませたのは私だ』と言わないためだ。

**24**：ただ若者たちが食べてしまった物と、私といっしょに行った人々の分け前とは別だ。アネルとエシュコルとマムレには、彼らの分け前を取らせるように。」

と。ソドムの王もアブラムに助けてもらったということで、お礼をしに来たわけです。「人々は私に返し、財産はあなたが取ってください。」これは、まさにこの世のシステムの象徴、この世の神サタンの象徴でもあります。誘惑をしてきたわけです。この世はあなたに欲しいものを与えてくれます。サタンはあなたに欲しいものを与えますが、サタンは「人は私に返して。魂は私に。お金が欲しければいくらでもあげますよ。その代わり魂は私によこしなさい」あなたの必要をいくらでもこの世は、この世の神サタンは与えてくれます。「これが必要なんです。これを手に入れば。これさえ買えば、私は満足します。幸せになれます。」とあなたが願うならば、そこへソドムの王がやって来ます。「魂をよこせば、いくらでもほしいものを、どうぞ好きなようにあなたに与えますよ」と。誘惑です。で、私たちはこの誘惑に弱いんです。必要だと思うものを私たちは欲しくて仕方ありません。喉から手が出るほど。

でもアブラハムはこの誘惑を退けることが出来たんです。私達も願わくは、退けたいと思うわけです。何度もこの誘惑に負けていますという人が、この中に大勢いると思いますが、どうやったら退けることが出来るでしょうか。このストーリーから見て明らかなのは、アブラムはその前に十分の一をささげたんです。十分の一をささげれば、あなたはソドムの王の誘惑を意図も簡単に退けることが出来ます。あなたの中にある食欲、むさぼり。それは十分の一をささげることによって、すっ飛ばされます。食欲の罪から、食いの罪からあなたは十分の一をささげることで開放されるんです。そして、そのことによって、あなたの人格も、パーソナリティーも、変えられます。どういう事かと言うと私達の、少なくとも私個人については生まれながらの性質は決して私は気前の良い人ではありません。与えるという人間ではありません。どちらかと言うと、とっておきたいタイプ、貯めておきたいタイプ、自分のものにしておきたいタイプです。皆さんもそうかもしれません。コレクターです。キープしたい。それが多くの人の生まれながらの肉の性質だと思います。でも私達の主人は、私達の父は、そうではありません。この方は気前の良い方です。

『**神は実にそのひとり子をお与えになったほどに世を愛された**』とあります。神は、与える神です。もし私たちが与えるようになるならば、ささげるようになるならば、惜しみなく分け与えるようになるならば、私たちは主人と、父と同じ性格を持つようになります。同じ性質に預かるんです。ですから十分の一をささげれば、あなたが父と同じような、気前の良い人、惜しみなく分け与えてくれる、そういう人に、そういう人間に、そういう性格に変えられていくんです。もともとはそうじゃなかったと思います。私はもともとはそうじゃなかったです。神様は勿論あなたのお金を必要としていません。天地万物を造られた神が、金欠ということは絶対にありませんから。お金が欲しくて「与えよ、ささげよ、献金せよ」と言っているのではありません。そうではなくて、神様が私たちに求めておられることは、要求していることは、お金

ではなくて、「もっとわたしにささげなさい。そしてわたしのようにになりなさい。」神が要求しているのは、お金ではなくて、あなたが父のようにもう一切お金にはとらわれない、完全に開放された、貪りだとか、食欲だとか、固執だとか、執着心だとか、そういったものから何もかもフリーになること。それを神様は望んでるんです。そのために神様はあなたに「十分の一をわたしのところに持って来なさい」と言っているわけです。神の願いはお金ではなくて、「わたしのようにになりなさい。キリストのようにになりなさい。」ということです。

アメリカの有名な牧師でチャールズ・フィンデルという人がいますが、そのチャールズ・フィンデルという人はこう言いました。「与える時ほど、私たちが神に似たものとなる時はありません。」アーメンと言いたいと思います。毎週、毎週、週の初めの日に初代教会では、コリントの教会では少なくとも収入に応じて十分の一が集められてました。神様は「そのようにしなさい。そのようにして欲しい」と願っているわけです。十分の一献金は神様のファンド・レイジングの方法ではありません。ファンド・レイジングというのは資金調達の方法であります。ファンド・レイジングでなくて、神のチャイルド・レイジングの方法だと言いたいと思います。チャイルド・レイジングとは子供を育てるということです。英語では、お金を調達することをファンド・レイジングと言います。十分の一でとにかく教会の何かのためにお金をかき集める、献金のアピールをして。それはファンド・レイジングと言います。でもそうじゃありません。本当はファンド・レイジングは、私達が神の子供のようになるように、チャイルド・レイジングのためになされることです。このことを是非心に刻んで下さい。英語の言葉ですが、分かりやすいと思います。十分の一は、神のファンド・レイジングの方法ではなくて、十分の一は神のチャイルド・レイジングの方法だということです。これによって私たちは神の子供になれるんです。父のように同じ性質を持って惜しみなく与える者に変えられるんです。そのために十分の一をささげる必要があります。それが神のとられた方法であります。私達を食欲の罪から、貪りの罪から、開放してフリーにするためです。お金持ちに言っているわけではありません。貧しい人にも言ってます。実はお金持ちよりも貧しい人の方が、よっぽどお金に固執することがあります。皆さんそれに気付いているでしょうか。「お金持ちは、ガリガリ亡者に違いない。」確かにそういう人もいます。でも意外とお金持ちの方が、それこそお金に執着していない人もいます。むしろ貧乏人の方がやたらめったらお金のことが気になって、お金の事ばかり気にする人が返って貧乏人の中にいます。ですからいろんなささげものをするのに、ある貧乏な人たちは「こんな高価なものを教会にささげるなんてもったいないじゃない」、なんて言う人がいます。でもお金持ちの人は、神様にささげるのは当たり前だから、高級なものだろうと、それが高価なものだろうと、当たり前です。でも貧乏な人に限ってお金がないからこそ、お金にこだわって「こんな高価なもの、もったいない」とか、とんでもないとか、「こんなものをささげたたら、他の人のプレッシャーになるじゃないですか。同じような高価な金額の物を、価値のある物をやらないといけないように思われるじゃないですか。」そんな心配をする必要は一切ありません。神様にささげるものであるならば、そんなことを私たちが心配する必要がありません。本当は、そんなことは心配じゃないんです。本当はあなたがケチだからです。本当はあなたは「神様になんてもったいない」と思っているからです。そんなものをささげるならば、自分のために使いたいと思っているのが本音であります。

で、もし十分の一を惜しまないならば、そのような罪、呪いからも守られます。ソドムの王の誘惑を容易に、簡単に退けることが出来ます。**コロサイ 3:2**にもこう書いてあります。私たちが見るべきところがどこか。向かって行くべきところがどこかということです。

**2: あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。**

地上に執着してしまうと、私たちは天にある私たちのその将来のことを見通したり、見越したり、将来の備えをするということを忘れてしまいます。目の前のことに、明日のことに、来月のことに、来年のことに、十年後、二十年後、老後のためにと、私たちはその先の本当に変わらない、滅びることのない永遠の将来に全く目が向かなくなってしまいます。地上のものに目を留めてしまうと、あなたは富に仕える羽目になります。イエスは「ふたりの主人に仕えることはできない」と言われました。そして、あなたがたは、『神』にも『富』にも両方に仕えることはできません。これは警告の言葉だと皆さん思うかもしれませんが、違います。『神にも富にも仕えることはできない』というのは、警告の言葉というよりも、素晴らしい約束の言葉です。何故かと言うと、「あなたはその富を、不正の富を、この世の富を主にささげることによって、あなたは主に仕えることができますよ」と、これが約束です。もしその富を、自分を支配させてしまうもの、富にとりつかれるようなことをあなたが許すならば、あなたは間違いなく富という、マモンという神にひれ伏すことになります。人生を完全に明け渡してしまうことになりますが、もしあなたがその富を、自分を支配させないようにして主にささげるならば、主の働きのために用いていくなれば、天国へと送金していくならば、あなたは間違いなく主に仕えることが出来るんです。これは驚くべき恵みです。主に仕えることは当たり前だと多くの人は思っています。当たり前じゃないんです。主に仕えることが出来ますよ、という恵みです。祝福です。それは十分の一をささげることによって、あなたの肉肉しい部分、とにかくケチくさい部分、貪りの部分、とっておきたいというその肉の性質、それが十分の一によって、献金箱の中に投棄されるようなものです。産業廃棄物のようなあなたの罪が十分の一と共に献金箱の中に投棄されるようなものです。それがあなたの肉の性質です。肉の性質も十分の一と共に主にささげることができます。それが生贄です。肉を焼くんです、祭壇の上で。主は喜んで受け取って下さいます。不正の富でも、この世の富でも、主が受け取って清めて下さいます。それによってあなたの肉の性質が焼き尽くされて、あなたが父のようなひとり子をも惜しまない、その与えることを喜びとするようなお方のように変えられるために、喜んで受け取って下さいます。主は「わたしにささげなさい。わたしのところに持って来なさい。わたしが祭壇で焼いたものを持ってあなたを開放するから」と。

神様は、何度も言いますが、リッチなお方です。お金など一切必要がありません。絶対に人々に間違った神観を植え付けてはいけません。献金のアピールをして、いかにも神様がお金がないような、いかにも神様が人間を当てにしているような、いかにも神様が貧乏人であるかのような、無力であるかのような、私たちが助けないと何も出来ない、そんな印象を人々に与えては絶対になりません。ですから十分の一をささげることで、何か皆さんが嫌々ながら、苦痛を持って、それがノンクリスチャンの家族に知られて、「結局、やっぱり、金か。キリスト教も金か。」そんな風に思われているならば、それはまったくもって不本意な、心外なことです。神様はあなたのお金などなんの当てにもしていません。あなたの十分の一なんかたかがしれています。でもそんなことよりも、もっと神様は恵みを、祝福をあなたにもたらしたいと、そうお考えになっております。その部分が明らかにされなければいけません。その部分が人々にも目で見て分かる位に、「本当に私は幸せです。喜びなんです。ささげることがこんなに嬉しいのです。」ノンクリスチャンの家族が、あなたがささげている姿を見て、嫌々そうに、シャアなしに、これが必要だから、みんなで当番で分配してとか、EVENで。そんな姿を見せているならば、しないほうがいいです。

そしてアブラハムがメルキゼデクに十分の一をささげて、ソドムの王には「人は私に返して、後はあなたのお気に召すまま、好き放題、食べ放題、どうぞ」と言うその誘惑に対して「ノー」と言えた。そこをもう一度思い出して下さい。私たちは弱者です。ソドムの王は常にあなたに囁きます。「人は私に。お金はどうぞ。物はどうぞ。娯楽は、快楽は、なんでもお好きにどうぞ」と。弱さを認めなくてはいけません。

で、ルカ 16 : 14 のところで、

14：さて、金の好きなパリサイ人たちが、一部始終を聞いて、イエスをあざ笑っていた。

とあります。今皆さんの中で私が話した内容を聞いて、あざ笑っているならば、あなたは金の好きなパリサイ人です。こういう話をすると必ず2つのリアクションが出てきます。一つは、この金好きなパリサイ人のように「そんな話は」と言ってあざ笑う人たち。もう一つのグループは、もう一つのリアクションは「素晴らしいですね」と。「今から献金しましょう。献金箱をもっと大きくして下さい。礼拝のプログラムに最初から始まって、真ん中あたりももう一回入れて、最後にもう一回献金の時間を作りましょうよ。どんどん袋を回しましょうよ」というリアクションのどちらかです。あざ笑うか、ますます喜んでささげるようになるか、その2つに1つです。もしあなたが、鼻でせせら笑って、その程度であるならば、あなたは金好きなパリサイ人です。神様は喜んで与える者を愛して下さいます。第2コリント8：9～11。

9：あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。

10：この献金のことについて、私の意見を述べましょう。それはあなたがたの益になることだからです。あなたがたは、このことを昨年から、他に先んじて行っただけでなく、このことを他に先んじて願った人たちです。

11：ですから、今、それをし遂げなさい。喜んでしようと思ったのですから、持っている物で、それをし遂げることができるはずです。

飛んで、9章7節。

7：ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛して下さいます。

神様から愛されるということ。これ以上の祝福、これ以上の喜び、これ以上の特権は、栄光は他に無いと思います。「お金が第一、お金が大好き、お金が無いと何も出来ません。」と思っている人たちは、いわゆる金銭主義、拝金主義、守銭奴、金の亡者。いろんな言い方がありますが、そういう人たちは、絶対に、神様から本当に自分は愛されているという実感を持ってません。これは事実です。絶対に金銭主義者では、満たされることはありません。物質主義者も同じです。快樂主義者も同じです。娯楽主義者も同じです。このことを事実として皆さんにお伝えしました。経験上、皆さんもこれが事実だと知っていると思います。お金に目がくらんだばかりに。お金に取り憑かれてしまったその時、あなたはどうだったのでしょうか。「本当に私は神様から愛されています、ハレルヤ」と言っていたのでしょうか。違うと思いますね。神様はあなたを愛しています。あなたをご自分と同じような性質を持つ神の子供に育てたいと願っています。そのために、方法まで用意して下さいました。それは決して難しいものではありません。無理難題ではありません。たったあなたの収入の10%でそれが実現するんです。神のようになれる。そのためにあなたの収入の10%でいいんです。安い買い物だと思います。これが聖書に約束されていることです。そして天には、あなたが想像しない、出来ない、天文学的な物凄い報いが、褒章が待っております。この世では、もしかしたら何の評価も受けないかもしれません、何の褒章もないかもしれません。〇〇賞とかいう賞ももらえなかったかもしれません。冠などもらえなかったかもしれません。でも天では違います。あなたにはありとあらゆる賞が待っています。〇〇賞受賞と。ノーベル賞どころではありません。エミー賞、グラ

ミー賞どころじゃありません。〇〇賞というのがあなたの天の凱旋を待って、そこにリストが用意され、冠がいくつも用意されて、物凄い富がそこには貯蓄されております。もし、あなたが十分の一を惜しみなく神のものとしてお返しして、そして奉納物を喜んで主におささげするならばです。ケチくさく、何とか自分の生活をとにかく精一杯して、「教会に行くためにはお金がいるんですよ。ガソリン代がかかるんですよ。」もし主があなたを導かれるならば、主はあなたの備えを絶対に備えられますから、疑ってはいけません。勝手に自助努力によって自分の備えをして、何とかキープする、生活を回す、教会生活も維持する。ではなくて、主にすがって、主にこのことについては試して見て下さい。絶対に主は裏切りませんから。約束を果たされる方ですから、是非試して下さい。試していなかったという人、すぐにチャンスがもうこの日曜日にありますから、是非試して下さい。では、今日はこれで終わりたいと思います。